平成３０年度　東濃地区教育推進協議会　中学校　実践交流会発表資料

国語科　　恵那市立恵那東中学校　小島　光太郎

１．研究主題について

（１）研究主題

目的や場面に応じて適切に表現する生徒の育成
～「実の場」を意識した
学習活動の設定を通して～

（２）主題設定の理由

①今日的課題から

昨今、「主体的」「対話的」「深い学び」という言葉が盛んに使われている。加速する国際化・情報化の中で主体的に生きていくために、音声言語によるコミュニケーション能力は必要不可欠であり、国語科学習における音声言語指導の重要性がクローズアップされている。

②実践上の課題から

音声言語の指導の重要性が取り上げられ、多くの実践が行われる中で、教室の中での学習が、社会生活に生きて働くものであるかという視点も重要である。現行の学習指導要領では、「社会生活に生きて働くよう」と、そして平成２９年告示の学習指導要領では「社会生活における様々な場面で、主体的に活用できる、生きて働く…」と記載されている。国語科の授業での学びが、他教科の学習で生かされることは言うまでもなく、学校生活を飛び出して実社会に出てもそのまま使えるものになることが望まれていると言える。

主題について

平成２９年告知の学習指導要領解説において、「話すこと・聞くこと」の指導事項アには「目的や場面に応じて」という文言がすべての学年で用いられており、「適切に表現する」ための核となる指導事項であると考えられる。そこで主題を「目的や場面に応じて適切に表現する生徒の育成」と定めた。

副主題について

主題にある「目的や場面に応じて適切に」話す力は、生徒が社会に出た際に、どんな時でも必要な力である。それを考えると、授業の中でもできる限り「実の場」を意識した学習活動の設定が必要とされると考える。その上で、「必然のある言語活動の設定」と「目指す生徒の姿の具体化」に焦点を当てた。「実の場」を意識することで、なぜ、何のために話すのかという目的意識が明確になり、言語活動に必然が生まれる。そして、目指す生徒の姿を具体化することによって、指導・援助が明確になると考えた。

（３）生徒の実態

①アンケート調査から

本年度担当している第３学年９４名を対象に、以下のようにアンケート調査を行った。

「話すこと」への主体性

（表１：「話すこと」アンケートの結果①）

質問項目	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い
「話すこと」の学習は好きか	11名	17名	34名	32名

目的や場面に応じて話す力

「相手に応じて分かりやすく話すためには、どのようにすればよいか。」（複数回答可）

（表２：「話すこと」アンケートの結果②）

回答内容	人数	割合
①声の大きさ、口調、話す速さに気をつける	41名	44%
②相手を見て話す	23名	24%
③敬語を使う	42名	45%
④相手の年齢に応じた語句を使う	6名	6%
⑤相手の知識に応じた内容を入れる	10名	11%

①と②は話し方に関わる部分である。

→生徒の認識の中では、「相手に応じて話す」ことは話し方を変えることが中心である。また、そこにはジェスチャー等は含まれない。

③は敬語の使用である。

→半数程度の生徒がこの必要性を感じていた。

④と⑤は内容面である。

→相手に応じて語句や内容を変えることについて必要であると感じている生徒は合わせても１７％であり、この部分の必要性を生徒はあまり感じていないことが分かった。

②レディネステストから

テーマ：「みのじのみのり祭の魅力を伝える」
相手：３０代の両親（小学生の子どもがいる）

すべての生徒が丁寧語を使うことができており、最低限の敬語表現はできていた。

また、内容面ではみのじのみのり祭の全体的な説明を書いている生徒が大半を占めていた。その中で、女性に人気のある食べ物や、子どもでも楽しめるイベント等、相手に合わせた内容を意識的に書いている生徒もいたが、２８％と少なかった。

（4）目指す生徒の姿

「目的や場面に応じて適切に表現する生徒」を以下のように定義した。

① 「なぜ」「何のために」話すのかというという目的意識をもって話すこと。 ② 話す相手によって、話の内容や構成、語句や口調など、言語的側面と非言語的側面を適切に使い分けて話すこと。（資料１　表２参照） ③ 話をする場の状況に応じて、事象がより分かりやすく伝わるような工夫をすること。

さらに③の「分かりやすく」という表現について、以下のように定義する。

（図１：「話すこと・聞くこと」のイメージ図）

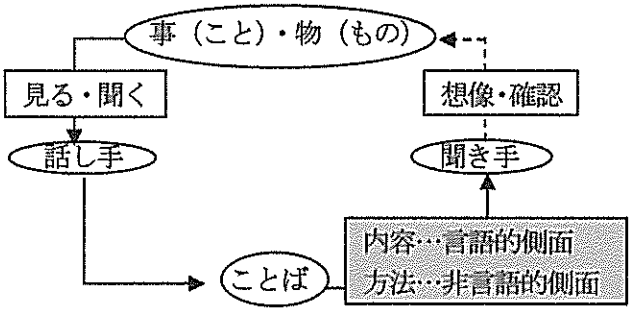


図１のように、話し手は、「事（こと）・物（もの）」を聞き手に伝えようとする際、「ことば」を介して音声言語で伝える。当然、話し手が「事（こと）・物（もの）」のすべてをありのままに聞き手に伝えることは困難である。その「事（こと）・物（もの）」の音、見た目、味、におい等を含む雰囲気は、音声言語のみで表すことは難しい。しかし、音声言語とともに実物や写真を見せたり、動作で示したりすることによって、音声言語のみの場合以上に情報を付け加えることができる。このような認識のもと、言語的側面、非言語的側面に分けて「分かりやすく伝える」ことを次のように示した。

言語的側面…聞き手に伝える情報を精査し、情報量を確保すること。 非言語的側面…写真資料を提示したり、身振り手振りを付けたりすることで、音声言語で表現する内容に対して補足をすること。（「資料１」　表２参照）

２．研究仮説

「話すこと」の学習において、 生徒が「話したい」と思うような言語活動を設定して、言語活動を通して目指す生徒の姿を具体化し、その姿に向けて焦点的な指導をすることによって、生徒は目的や場面に応じて適切に表現する力を身に付けるであろう。

３　研究内容と具体的方法

（１）指導計画の工夫

①テーマ設定の工夫

②目指す生徒の姿の具体化

（２）指導の工夫

①指導事項を効果的に身に付けさせるための指導の工夫

ア　目指すべき姿を明確にするモデル提示

イ　「分かりやすい」スピーチにするための言語的側面・非言語的側面の指導

４．実践事例

光村図書　第３学年 「社会との関わりを伝えよう」の学習より

（１）指導計画の工夫

①　テーマ設定の工夫

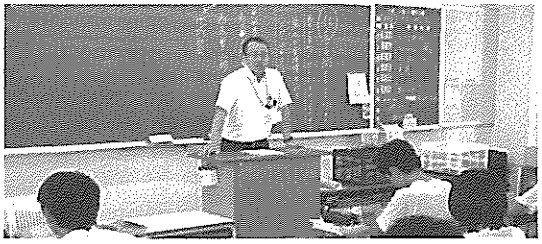
教科書では、「社会との関わりを伝えよう」という教材名で、「森林ボランティアに参加して」というテーマで例文が書かれている。これに沿って、生徒が地域社会の中で行ったボランティア活動を題材にしてスピーチをすることも可能である。しかし、当然全員がボランティア活動への参加経験があるわけではなく、経験のある生徒であってもそれを他者に対して発信したいと考えるかは分からない。

そんな中、今現在地域社会の中で話題となっていることに恵那市の観光客数の増加がある。これはＮＨＫの連続テレビ小説「半分、青い。」で放映された舞台に岩村町が出てきたことが直接的なきっかけとなっており、放送開始から２ヶ月間の観光客数は前年の同月と比較して４倍にも上るとの報道もされている。しかし、観光客の増加が永続的なものであるかは不透明であり、これらの人気が一過性のものとならないよう、恵那市が案を出し合っているという新聞記事があった。今現在のこのような恵那市の状況を鑑み、岩村町や五平餅のみでない恵那市の魅力を発信することが、生徒にとっても恵那市にとっても有意義な活動になると考えた。そこで、以下のような単元、題材を考えた。

単元名：　「『目的意識』『場面意識』をもってスピーチしよう」 題材名：「恵那市の魅力をアピールする」

なお、単元の導入時には恵那市役所商工観光部交流課の西尾係長さんにご来校いただき、上記のような恵那市の現状を話していただくとともに、「恵那市の魅力をアピールするスピーチをして欲しい。」という依頼を、生徒に向けてしていただいた。

（写真１：単元の導入での西尾係長さんの話）



② 目指す生徒の姿の具体化

本単元では、指導事項ア「目的や場面に応じて、社会生活の中から話題を決め、多様な考えを想定しながら材料を整理し、伝え合う内容を検討すること」と、ウ「場の状況に応じて言葉を選ぶなど、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。」の２点を重点指導項目とした。そして、アとウについて、「学習指導要領の指導事項」→「学習指導要領の解説」→「目指す姿」という順序で生徒の姿を具体化し、生徒の実態を踏まえて「この単元でこそ身に付けさせたい力」をより明確にした。

指導事項アについて

指導事項	多様な考えを想定しながら材料を整理し
解説	様々な考えをもった聞き手がいることを踏まえること。同じ事柄であっても、知識や経験、立場などによって自分とは異なる多様な意見や考え方があることを前提にコミュニケーションを図ること。
目指す姿	年齢や性別による立場の違いによって、求める情報が違うことを理解し、それぞれの年齢層や性別に合った情報を収集し、整理することができる。

指導事項ウについて

【言語的側面】

指導事項	場の状況に応じて言葉を選ぶ
解説	・話をしている場の状況に応じた言葉遣いをしたり ・分かりやすい語句に言い換えたり内容を補足したりすること。
目指す姿	・相手の年齢によって、敬語を用いなかったり、必要に応じて敬語を用いたりすることができる。 ・相手の年齢によって語彙量に差があることを理解し、相手によって理解しやすい語句を用いることができる。 ・場の状況に応じて方言を意図的・効果的に用いることができる。

【非言語的側面】

指導事項	自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する
解説	聞き手の人数や立場、年齢構成、会場の広さ等を踏まえた上で、自分の考えが分かりやすく伝わる話し方を工夫すること。
目指す姿	以下のような非言語を用いて、音声言語のみでは伝えきれない内容を補足することができる。 ・身振り手振りを交えて話をすることができる。 ・実物や絵、写真等の資料を示しながら話をすることができる。

（２）指導の工夫

①指導事項を効果的に身に付けさせるための指導の工夫

ア　目指すべき姿を明確にするモデル提示の工夫

第３時（指導事項ア）の場面【言語的側面】

瑞浪市の「サイエンスワールド」を例に、どのような原稿が「相手意識」がある原稿といえるのかを生徒に示した。最初に、３０代の子育て世代を相手とした時の原稿である。（資料２参照）

Ｓ１：料金のことが「無料」と３回繰り返して強調して書いてある。
Ｓ２:家族で行くと食事のことで困る人もいるから、その人のために食事のことが書かれている。
Ｓ３：車で行きやすいところかが気になる人も多いから、交通手段のことが書いてある。
Ｓ４：周辺の施設のことが書いてある。

このようにして、「相手意識」のある内容とはどのようなものかを、モデルという実物を示すことで生徒に理解させた。（１０歳以下向けは資料３参照）

第４時（指導事項ウの指導）の場面【非言語的側面】

非言語があることによって、伝えたい事物の様子が分かりやすくなることを感じさせるために、私自身がモデルの提示をした。モデル文のスピーチをしながら、「サイエンスワールド」内の写真を見せたり「カチカチに凍ったゴムボールを地面に叩きつけて割ったりする様子」や「液体窒素に付けた草花を握って粉々にすることも体験させてもらえ」の部分をジェスチャーで示したりした。生徒に感想を聞くと、「言葉だけでなく、写真があることによって、その場の様子がすごく想像しやすい。」、「動作を付けてやることによって、実際どのような感じなのかが分かりやすい。」と言った意見が出された。

ここで「体を使った表現」と「物を使った表現」とに分類して生徒に示し、「分かりやすく伝える」ために大変有効であることを確認することができた。

体を使った表現
- 自分が実際に見たことや体験したことを、身振り手振りでジェスチャーとして動作で表す。
- 手を使って物の形を表す。
- 指の本数でものの数量を表す。

物を使った表現
- 実物を見せる。
- その場面や物が伝わるような絵や写真を見せる。

イ　「分かりやすい」スピーチにするための言語的側面・非言語的側面の指導

第３時（指導事項アの指導）の場面【言語的側面】

前述ようにモデルの原稿を作成したが、授業者である私自身も、モデルを作るまでに頭の中で相手意識を明確にして原稿を作った。そこで、生徒にも私が行ったのと同じ過程で原稿を作成するように指導した。具体的には「相手分析」という方法である。（資料４―①参照）

生徒にプリントを配布し、それぞれが「この人に伝えたい」と思う相手を想像しながら相手分析を行わせた。資料の生徒は「５０～６０歳以上」の人を相手に「のんびりできる恵那峡の魅力」を伝えるための相手分析をしている。このような段階を経たことにより、生徒の書いた原稿に、より相手が必要とする情報を入れられるようになった。

第４時（指導事項ウの指導）の場面【非言語的側面】

モデル提示の後、生徒の書いた原稿のどこに非言語を入れることができるかを考えさせ、プリントに記入させた。（資料４-②参照）

生徒は、自らの原稿を見ながら、音声言語だけでは伝わり切らない部分について、それを補うための効果的な伝達手段について考えた。そして、自分の伝えたい事物を効果的に示すことができる写真を探したり絵を描いたり、ジェスチャーを考えたりした。

５　成果と、課題をもとにした指導改善の方法

○「恵那の魅力を発信しよう」とテーマの設定を工夫したことによって、生徒は身近な題材について考え、主体的にスピーチ本番に向けて学習を積み上げていくことができた。また、西尾係長さんに来校していただいて「依頼」という形で話をしてもらったことも、明確な目的意識につながった。

（表４：単元終了時「話すこと」アンケートの結果）

質問項目	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い
「話すこと」の学習は好きか	21名	36名	20名	17名

○目指す生徒の姿を具体的にしたことによって、以下のような良さがあった。
- 目指す姿が明確になったことで、それを満たしたモデルを生徒に示すことができた。
- モデルで示した姿に近づけるよう、指導すべきことが明確になり、焦点的な指導が可能になった。
- 生徒が目指す姿に到達しているかどうかの評価がしやすくなり、到達していない生徒はもちろん、到達している生徒への指導・援助もしやすくなった。

結果、以下のように力を付けることができた。

（表５：単元での指導内容と達成状況）

指導内容	人数	割合
①敬語を適切に使用する	94名	100%
②年齢や性別等、相手に応じた内容を話す	90名	96%
④　身体言語・物品言語を用いて話す	90名	96%

●相手分析をして、年齢や性別に応じて必要だと考えられる情報を考えさせたが、生徒個々で考えたため、主観的な内容に偏った部分がある。

指導改善の方法→観光に関わる統計資料等を参考にして、相手に応じて必要な情報を収集させる。

●非言語を入れることを指導し、多くの生徒がスピーチの中で入れることができていたが、それが「分かりやすく伝える」ために効果的であったかどうかについては検証が必要である。

指導改善の方法→生徒が採用した非言語の妥当性を考える時間を設ける。その写真が本当にその物を表すのにふさわしい写真かといったことや、ジェスチャーはその事物が分かりやすいものであったかといったことを吟味する時間を作るとよい。

●生徒の意識の中で、「話すこと」が目的となってしまい、「伝えること」ができていないと感じられる場面があった。それは、「人を動かそう」という生徒の熱意の希薄さから感じられた。

指導改善の方法→班内で話す練習（スピーチのリハーサル）をする際に、「聞き手を見て話していたか」や「『物を使った表現』は使えていたか」等を評価項目としたために、項目を満たしたかどうかが生徒にとって大切なことになってしまった。聞き手側に「行きたい、食べたいと思ったか」と評価させることで、話し手の「人を動かそう」という意識につながるようにしていきたい。

【参考文献】

- 中学校学習指導要領解説　国語編
  （平成30年３月31日　文部科学省）
- 音声言語大辞典（1992年２月　高橋俊三　編）
- 話すことの指導（1994年６月　高橋俊三　編著）